

# 成績分析からみた大学教育の研究(1) 課題の検討にむけて

大江篤志, 水谷 修

## はじめに

大学における自己点検や自己評価の対象範囲は学生指導、就職指導、教務指導など多岐にわたっている。また点検、評価の主体も大学内部の学生や教員、内部委員会から外部機関まで多様である。しかし教育機関として大学をみた場合に、点検評価の主体がどこにあらうとも、その対象から教授－学習過程を切り離して議論することには多大の疑念を抱かざるをえない。すなわち大学における教授－学習過程においていったい何がおこっているのか、またそれを規定する条件にはどのようなものがあるのかなど、現実の教育場面の理解を欠いて点検や評価は成り立つものではないであろう。

本研究の主要な目的は大学生の教育過程、つまり入学から卒業にいたるまでの過程を成績の分析をとおして明らかにしていくことにある。もう少し具体的にいえば、学生の成績分析をとおして、学生にたいする成績評価を規定している、あるいはそれに関連していると推定される条件を特定することにある。その意味で本研究は大学の自己点検、自己評価のあり方、あるいはまた大学教育の理念を直接検討するわけではないが、こうした議論の前提となっている、あるいは前提となるべきはずの教育事象を対象とする点でなにがしかの関係をもつものと考えている。

ここでなぜ成績分析をおこなうのかについて、一言ふれておかなければなるまい。

第1に現状においては大学の教授－学習過程を総括的にとらえるための方法というものがごく限られている。教育場面における実際をどのようにしたらみることができようか。まず教室などでの組織的観察による方法は観察自体の可能性、観察対象の一般性の確保、観察－評価組織の人員構成など、いくつかの理由からきわめて困難であろう。そこで登場するのが学生による授業評価である。これによって学生が講義や指導にたいしていかなる態度や認知を形成したかを把握することが可能となるであろう。しかしこの方法だけでは学生の授業評価と同一のレベルで教員サイドが受講学生集団にたいしていかなる評価

態度を有していたのかの把握が欠落しがちである。授業は学生－教員間に成立する一種の社会的関係である以上、授業評価は教授者－学習者双方についておこなうべきものと思われる。

しかし視点を転ずれば教員サイドは学生にたいしてほぼ伝統的に成績という形での評価をおこなってきている。そしてこれがどのようなになっているかの全体的把握に関する報告は必ずしも多いとはいえない。採点処理の形式は多様であるが、ここでは一括して成績とっておく。

第2に実質的に教員サイドが責任をもっておこなう評価は成績をおいてほかにあまりないという現実がある。レポート、論文、作品、あるいは実技的達成度も成績という形に換算されているのが実情である。これらはあくまでも教員からの評価であるが、そこに教員の教授側面と学生の学習側面との双方の関係をみることができるものと思われる。

しかし大学における教育というものがすべて成績に集約されている、あるいは成績評価がすべてにわたって適切であるとは考えていないことをあらかじめ断わっておかなければならない。むしろ大学における成績評価のありかたそのものを検討することが本研究のねらいの1つとなっている。

また成績があたかも客観的な指標であり、それによって大学間あるいは同一大学内部の学部間の相互比較が可能であるとも思っていない。これらはそれぞれ教育的目標やその具体化ともいうべきカリキュラムを異にしているのであるから、直接比較そのものにそれほど意味があるとは思えないのである。それは極論すれば異文化相互の直接比較のようなものであり、むしろ大学教育への歪んだイメージをあたえてしまう危険をとまなう。したがって成績分析はできる限り等質的な教授－学習の場、具体的には学科、あるいは専攻を最大の輪郭としておこなうことになるであろう。

学生の成績と一口にいても1学生が卒業までに受講する科目は相当数にのぼる。また科目の性格も必修・選択、教養・専門、資格などさまざまである。従来はこれらの成績は手作業による記入が主であったため、これを統計的に処理することは不可能ではないにしても、膨大な時間と労力を必要とした。また成績そのものが学生のプライバシーにかかわる個人情報であるために扱ひも慎重に慎重を重ねるべきものであることが、これらの処理を一層困難なものにしていたといえる。

近年コンピュータ処理方法が導入されるようになり、処理そのものは以前にくらべると容易になっている。しかしそれだけに個人情報の守秘にかかわる問題がいつそう要請されるようになってきていることを忘れてはならない。本研究は関係部局との緊密な連携のもとにこれらの条件に対応してきていることを付記しておく。

本報告では成績の分析においていかなる課題が成立するのかを検討することを目的としている。上述したように分析の基本単位を同一学科、同一専攻に限定したとしてもカリキュラムの性格は多種多様であり、そもそもこれらをいかようにカテゴライズするのか、それ自体の検討がまず求められるであろう。それ以外にも分析の前に検討すべき課題は山積している。成績はたしかに客観的な指標であることに違いはないのであるが、しかしそれを無前提的に処理することには大きな危険が付きまとう可能性があるからである。本報告では本学の2000年3月に卒業した学生を例に取り上げ、これを手掛かりにして本研究の課題そのものを検討していくことになる。

## 1. 各学科の学生構成

### (1)問題関心

能力、学習への動機づけと態度などの学生側の個人的条件とカリキュラムや教授環境が等質的な学生集団が2群あり、それぞれのカリキュラムや教授方法、集団規模が異なっているとすると、これらの学生の成績平均値は同じくなるであろうか。ここで集団規模を受講科目者数におきかえてみよう。一方の集団は小規模授業であり、他方のそれは大規模であると考えるとよい。

教育設備が同一であり、規模の大小にかかわらず講義の聴取に支障がないとした場合でも一般に小規模の方がよいという考え方が成り立つ一方、大規模の方が相互に刺激しあうのであるから成績は大きくは変わらない、という考え方も成り立つ。もちろん現実的には個人的条件が等質であったとしても、その程度が考慮されるべきであるし、規模に極端な差がある場合にはより複雑な条件が加わってくるであろうから、問題はそれほど単純ではない。しかしここで注意したいのは規模の大小によって学生－教員間の対面関係の質、

あるいは両者の親密度が左右される可能性があること、成績評価の方法の選択が影響される可能性があることである。

採点処理にたいして明確な共通基準を打ち出し、それにしたがって評価をおこなっているような大学はまれであろう。むしろこの種の評価は国家試験などの外部機関にゆだねられていることの方が多くに思われる。

少人数による演習・ゼミと、教養・専門をとわず大規模講義形式の授業とでは科目の設置目的と運営方法がそもそも異なるのであるが、これらの成績分布はどのようになっているのであろうか。採点処理作業そのものが科目受講者数の多寡によって影響を受けることはたしてないのであろうか。授業科目の性格によって採点処理の方式や評価基準が異なり、それが成績に反映されることはないのであろうか。

## (2)学部学科別学生数

ここで本学の学部学科別学生数をみておく。【図1】は1996年4月に入学し4年後の2000年3月に卒業した学生と、少数ではあるが1998年4月に他大学から編入学、あるいは本学学部学科間での転部転科をはたした学生で、2000年3月に卒業した学生数（以下、「対象卒業生」とする）を学部別に図示したものである。なお資料分析作業の都合上、本報告では工学部を除いているので、対象とするのは文学部、経済学部、法学部、教養学部、および二部経済、英文学科の文系4学部である。以下においては二部を関係学部から分離して扱っている。

上記の条件に該当した学生総数は2,305人であり、うち男子1,381人（59.9%）、女子924人（40.1%）であった。男女比はほぼ6：4となっている。

対象卒業生が最大の学部は経済学部であり945人（全体の41.0%）、次いで多いのが文学部であり450人（19.5%）である。法学部は382人（16.6%）、教養学部248人（10.8%）である。二部では経済学科が241人（10.5%）、英文学科が39人（1.7%）であった。

次にこれを学科専攻別にみておく【図2】。なお経済学部は経済学科、商学科、二部経済学科、文学部は英文学科、基督教学科、史学科、および二部英文学科、法学部は法律学科の1学科である。教養学部は教養学科の1学科あるが、人間科学、言語科学、情報科学

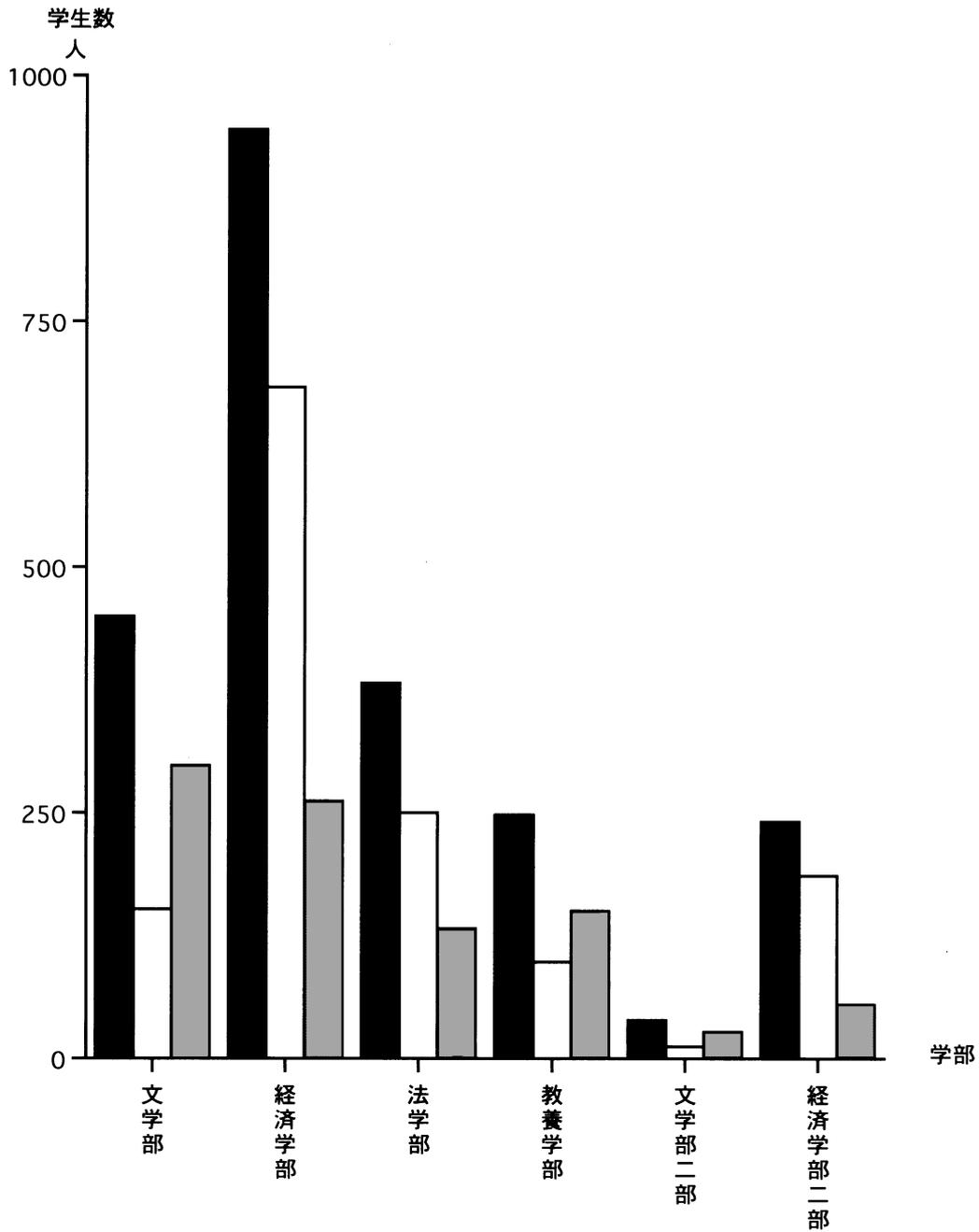


図 1 学部別学生数

- 全体
- 男子
- 女子

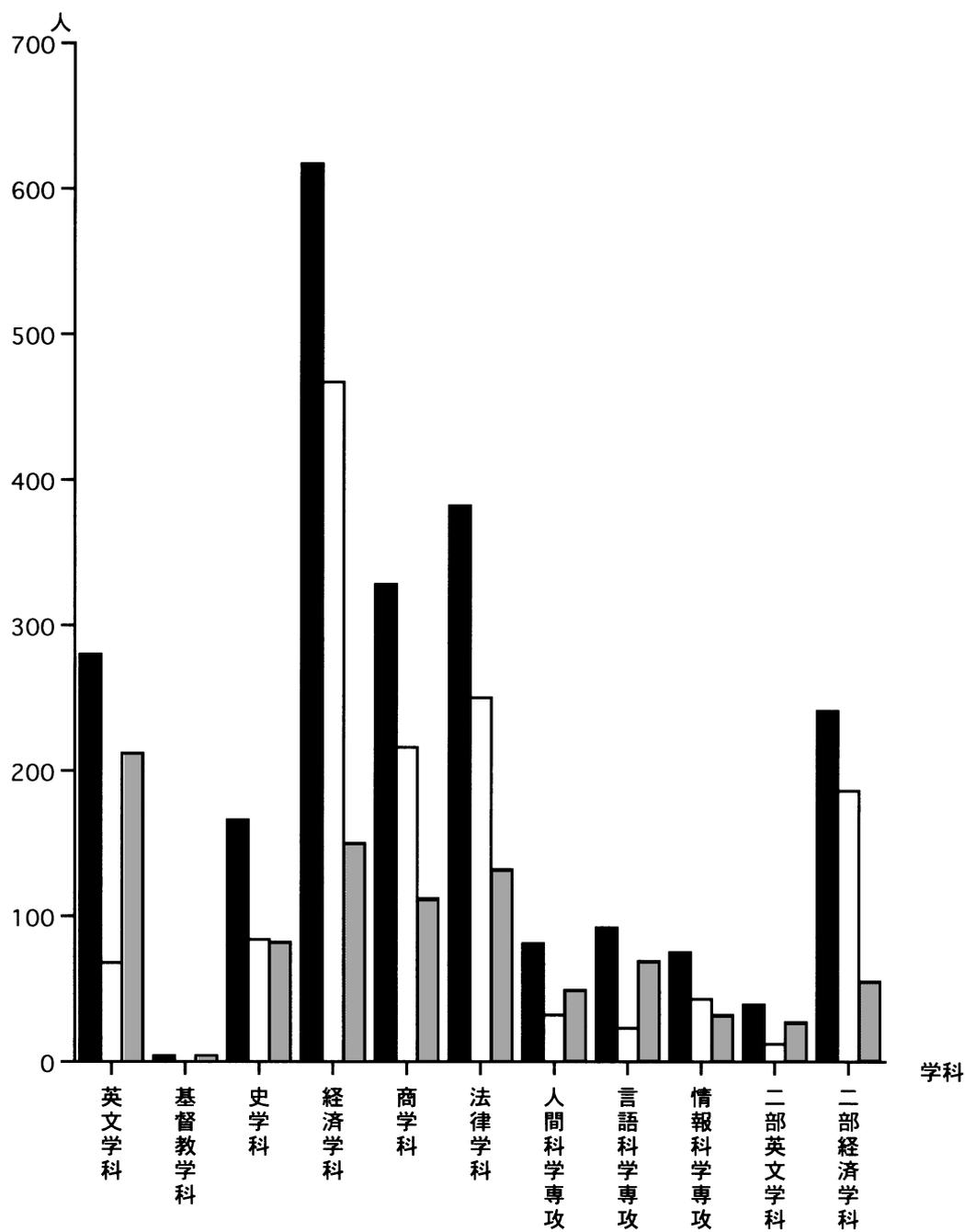


図 2 学科別学生数

- 全体
- 男子
- 女子

の3専攻が設置されているので、以下においては専攻ごとに表記する。

対象学生数が最大学科は経済学科であり617人(26.8%)に達する。これに次ぐのが法律学科(382人、16.6%)、商学科(328人、14.2%)、英文学科(280人、12.1%)である。教養学科は248人(10.8%)である。専攻単位では人間科学81人(3.5%)、言語科学92人(4.0%)、情報科学75人(3.3%)となる。史学科は166人(7.2%)であった。最少は基督教学科であり4人(0.2%)にとどまる。

### (3)各学科の男女比

学科単位でみた場合の対象学生の男女比率はさまざまである。以下においては男子を100とした場合の女子の比率をとおして、各学科の男女構成をみていく。

基督教学科は学生数が僅少であるために入学年度単位の変動幅が大きいと思われるが、対象卒業生に限っていえば女子だけであった。

同様に女子が男子を上回っているのは英文学科(312)、言語科学(300)、二部英文学科(225)、人間科学(153)である。

史学科は98であり、男女比がほぼ1:1となっているとみなしてよいであろう。

これにたいして情報科学(74)、商学科(52)、法律学科(53)、二部経済学科(35)、経済学科(32)は男子が女子を上回っている。

対象学生数の大小と男女比率を指標とする2次元空間に各学科を模式的に配置すると【図3】のようになる。この模式図においては、学生数の大小を、最大の経済学科の半数309人を、また女子比率は当該学科・専攻の女子割合50%を基準として軸を定めているが、原則として各次元につき連続的に配列するようにしている。

経済学科、法律学科、商学科は学生数が多く、女子比率が低い学科群を構成している。これと対局にあるのが基督教学科、二部英文学科、言語科学、人間科学であり、学生数が少なく、女子比率の高い群となっている。史学科はこれらのほぼ中間に布置している。

英文学科と二部経済学科は学生数は中程度であるが、女子比率に関しては対照的であり、前者が女子比率が高く、後者は低い。そしてここでも史学科はこの2学科の中間に位置し

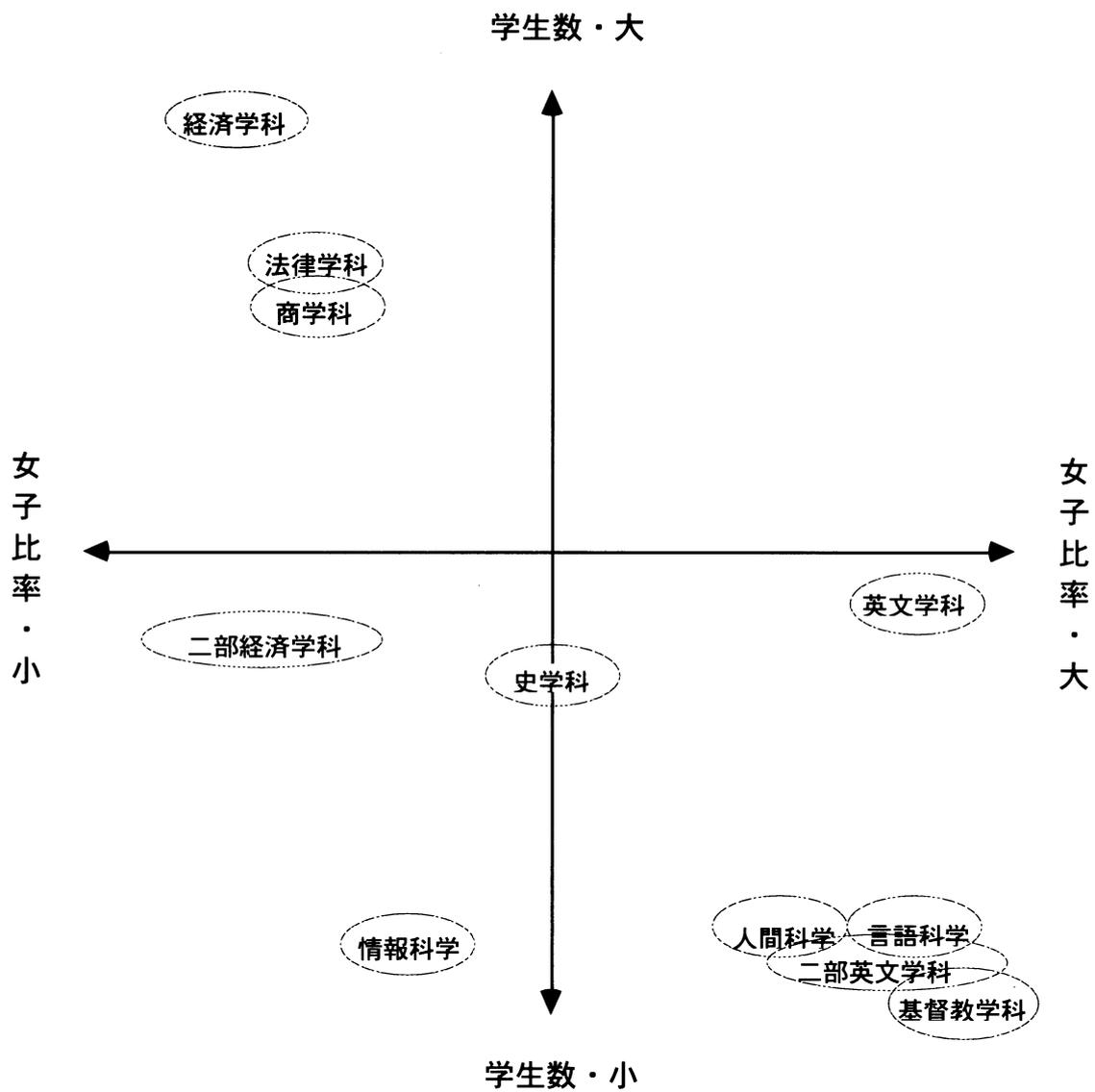


図 3 対象学生数と男女比からみた学科の分布

ている。

情報科学は学生数が少なく、女子比率はやや低く、対象学科のなかではやや特異の位置にある。

各学科の学問的性格をひとまとめにしていうことは簡単ではないが、あえていえば社会科学性格の学科においては学生数が多く女子が少なく、人文・行動科学的学科と対照をなしている。

以上のように各学科・専攻にあっては対象卒業生の数的、性的な人的構成にかなりの相違がみられる。しかも上述したようにカリキュラムの基本単位は学科・専攻にあることを考慮すると、成績分析の基本的枠組もまた学科レベルにおいた方が適切であると考えてよいであろう。

このことは今後の成績分析の作業においては学科の教授－学習の場についての組織論的視点からのアプローチが重要となることを意味していよう。

## 2. 対象卒業生の成績

【図4】は対象卒業生の成績評価点（以下、単に「成績」とする）を男女全体、男女別に表示したものである。これは受験した科目にたいする成績の平均値であり、放棄された科目はこれには含まれていない。この成績は教養、専門、資格などすべての科目にわたっているし、不合格科目も含まれている。したがって合格科目に限れば平均値はもっと高くなる。

これによると全体の成績の1人あたりの平均値は70.6である。男女別にみると男子は67.2、女子は75.7であり女子の方が8.5ポイントだけ高くなっている。女子の方が一般に成績が高いとするなら、学科ごとに男女比率が同じくはなっていないのであるから、女子の比率の高い学科は成績は概して高くなる可能性がある。

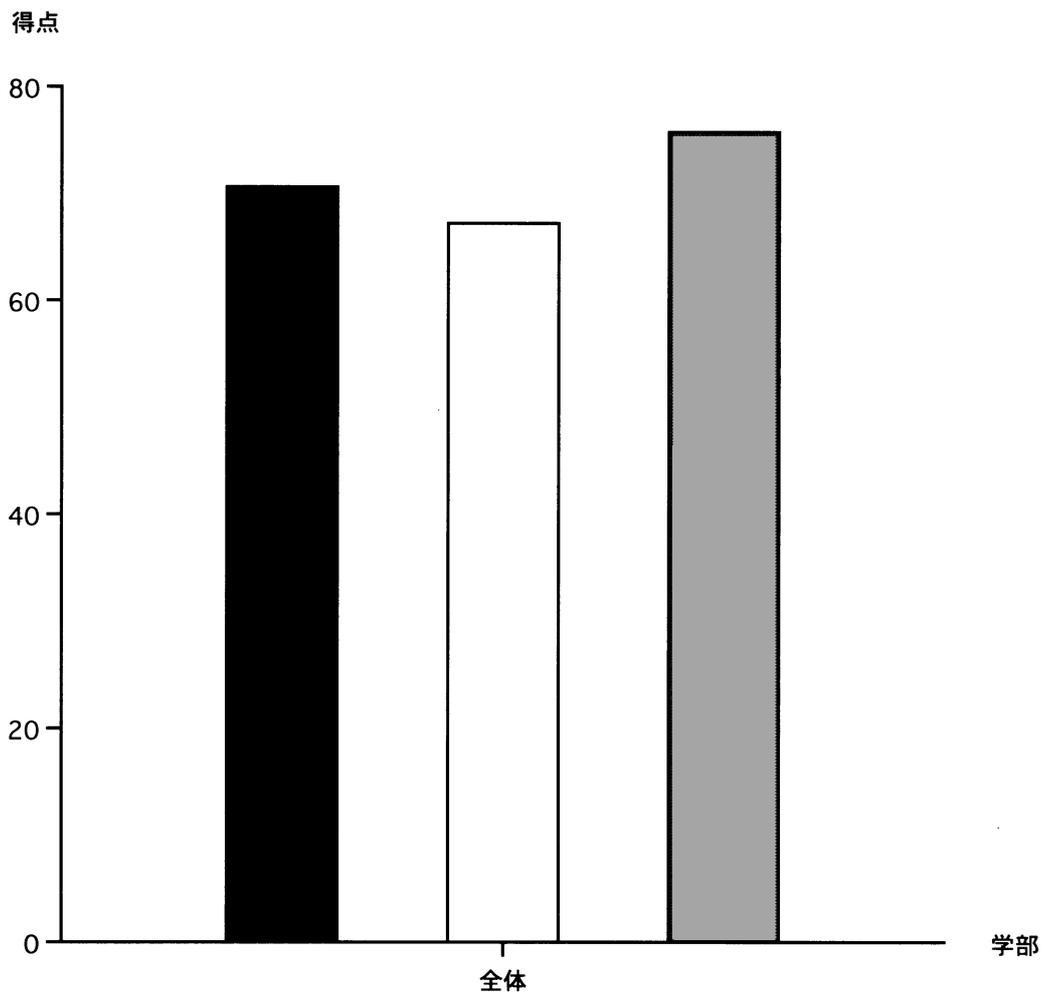


図 4 4 学部の成績の平均値

- 全体
- 男子
- 女子

### 3. 合否、放棄科目数の学科別男女別分布

次に受講科目中の合格科目、不合格科目、放棄科目を学科別にみておく。本学においては成績評価点60点以上が合格、60点未満が不合格である。放棄科目とは年度当初に設定されている科目登録期間中に登録した科目のうち、なんらかの事情によりその評価を受けなかった科目のことであり、受講の途中放棄、試験欠席などがその主な理由と考えられる。

関連図においては各学科における登録科目中の合格科目、不合格科目、および放棄科目の平均数をあらわしている。各科目の単位数は今回は考慮にいていない。したがって4単位科目の場合もあれば2単位科目の場合もある。以下に学科別、男女別に登録科目における合格・不合格・放棄科目の割合をみていくが、合格科目の割合を「通過率」としておく。

#### 3.1.文学部4学科

文学部4学科の登録科目に占める合格、不合格、放棄科目の割合を整理したのが【図5-1】である。

##### (1)英文学科

男子の登録科目中の合格科目割合は82.2%、不合格科目8.1%、放棄科目9.6%である。女子ではそれぞれ91.0%、4.0%、5.0%であった。男子は女子にくらべると、①通過率が低い、②逆に不合格、放棄科目割合が高い、また、③男女共に放棄科目が不合格科目割合を上回っている。

##### (2)史学科

男子の合格科目割合は78.8%、不合格科目と放棄科目はそれぞれが10.6%である。女子にあってはそれぞれ93.2%、3.8%、3.1%である。史学科においても男子は女子にくらべると、①通過率が低い、②逆に不合格、放棄科目割合が高くなっている。しかし英文学科とは異なり、③男女共に放棄科目が不合格科目割合を下回っている（女子）か、同数（男子）となっている。

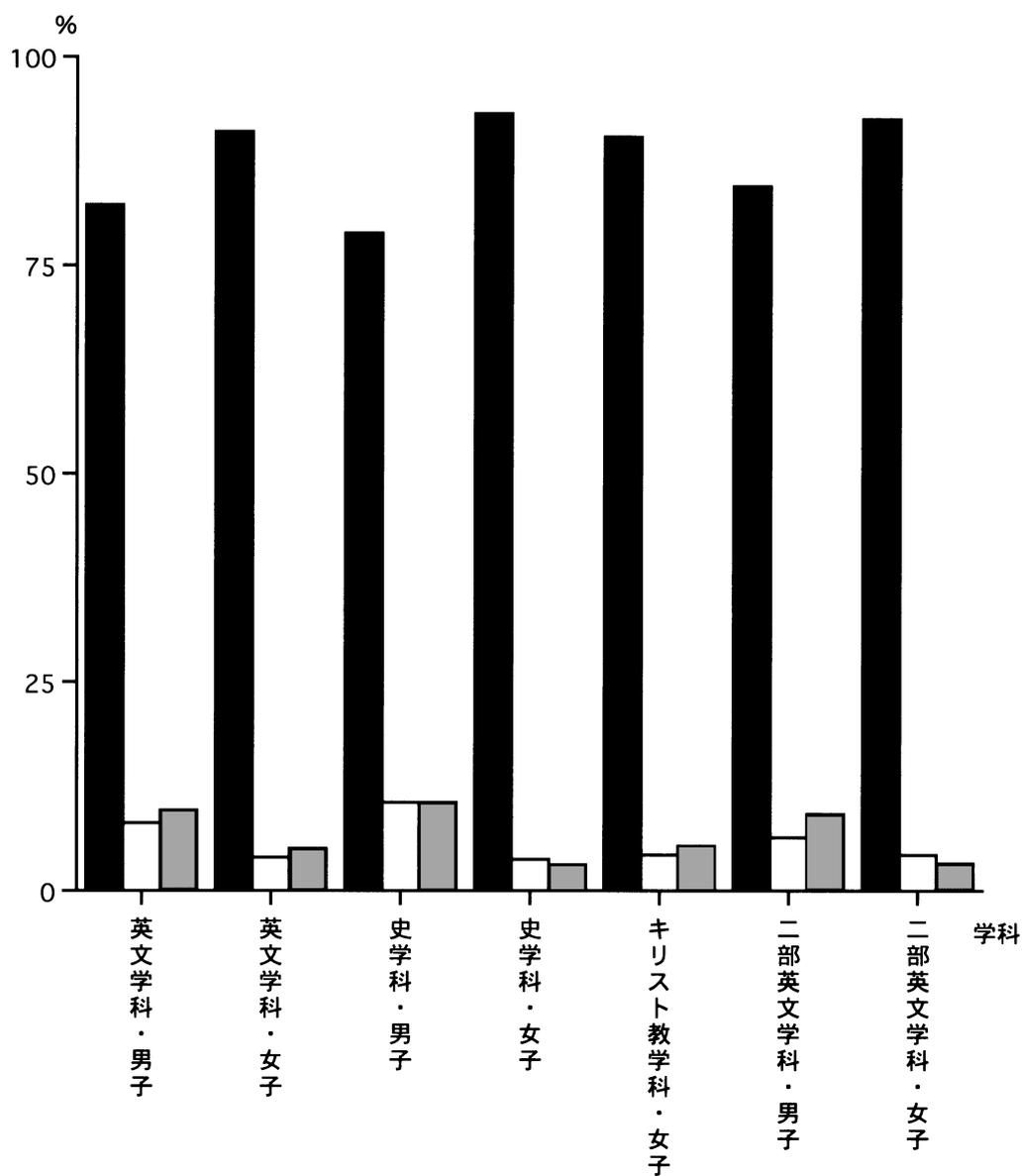


図 5-1 文学部 4 学科における合否割合

- 合格
- 不合格
- 放棄

### (3)基督教学科

本学科の対象卒業生はすべて女子である。合格科目割合は90.4%、不合格科目は4.3%、放棄科目は5.3%であった。ここでは英文学科と同様に放棄科目が不合格科目を上回っている。

### (4)二部英文学科

男子の合格科目割合は84.5%、不合格科目と放棄科目の割合はそれぞれ6.4%、9.2%である。これにたいして女子の場合、それぞれ92.5%、4.3%、3.3%である。この学科においては、①女子の通過率は男子よりも高い、②不合格科目と放棄科目の割合は男子が高い、③男子では放棄科目が不合格科目を上回っているが、女子ではその関係が逆転する。

以上のように文学部4学科においては、①女子の通過率は男子よりも高い、②不合格科目と放棄科目の割合は男子が高い。また放棄科目と不合格科目の比率は学科により異なり、前者が後者を上回る場合（英文学科男女、基督教学科、二部英文男子）もあるが、前者が後者を下回る場合（史学科と二部英文学科の女子）もある。

## 3.2.経済学部3学科

【図5-2】は経済学部3学科の登録科目に占める合格、不合格、放棄科目の割合を整理したものである。なお経済学科、商学科においては例数としては僅少であるが、3～4年一貫の演習の3年次評価はなされていない場合があるので、これを除外している。

### (1)経済学科

男子の合格科目割合は79.1%、不合格科目は15.7%、放棄科目5.3%である。女子ではそれぞれ88.2%、8.7%、3.1%となっている。これによると、①男子の通過率は女子よりも低い、②不合格科目、放棄科目ともに男子が女子を上回っている、③男女共に不合格科目が放棄科目を上回っている。

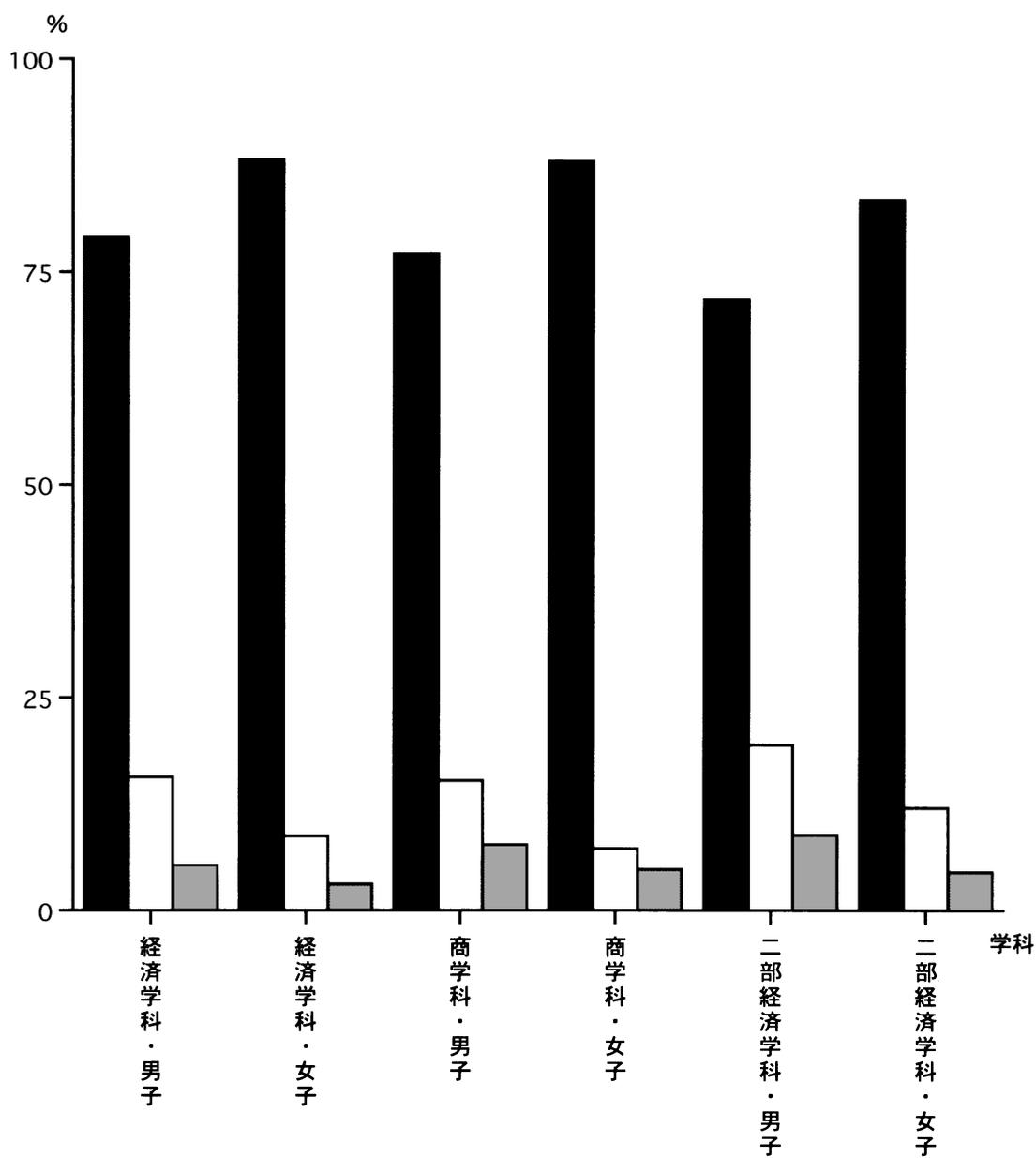


図 5-2 経済学部 3 学科における合否割合

- 合格
- 不合格
- 放棄

## (2)商学科

男子合格科目割合は77.1%、不合格科目15.2%、放棄科目7.7%であり、女子のそれは88%,7.2%,4.8%である。ここでは、①男子の通過率は女子よりも低い、②不合格科目、放棄科目ともに男子が女子を上回っている、③男女共に不合格科目が放棄科目を上回っている。

## (3)二部経済学科

男子の登録科目中の合格科目割合は71.7%、不合格科目19.4%、放棄科目8.9%である。女子ではそれぞれ83.5%,12.1%,4.5%であった。この学科においても、①男子の通過率は女子よりも低い、②不合格科目、放棄科目ともに男子が女子を上回っている、③男女共に放棄科目が不合格科目を上回っている。

以上のように、経済学部においてはどの学科にあっても、①男子の通過率は女子よりも低い、②不合格科目、放棄科目ともに男子が女子を上回っている、③男女共に不合格科目が放棄科目を上回っている。

## 3.3.法学部法律学科

法律学科の登録科目に占める合格、不合格、放棄科目の割合を整理したのが【図5-3】である。

これによると男子の登録科目中の合格科目割合は69%、不合格科目19.5%、放棄科目11.5%である。女子ではそれぞれ83.1%,9.7%,7.2%であった。法律学科においては、①男子の通過率は女子よりも低い、②不合格科目、放棄科目ともに男子が女子を上回っている、③男女共に不合格科目が放棄科目を上回っている。

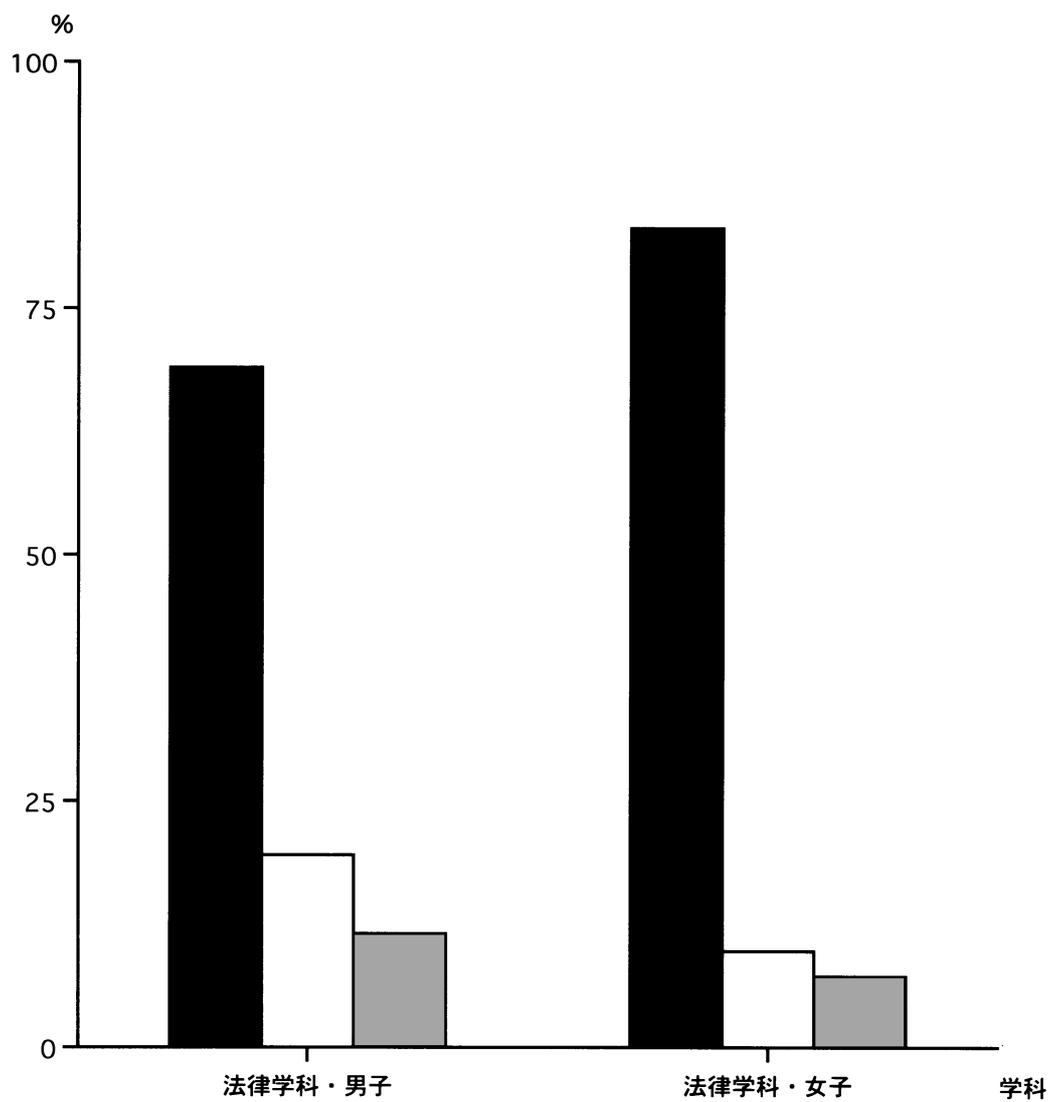


図 5-3 法律学科における合否割合

- 合格
- 不合格
- 放棄

### 3.4.教養学部

教養学部教養学科の3つの専攻の登録科目に占める合格、不合格、放棄科目の割合を整理したのが【図5-4】である。

#### (1)人間科学専攻

男子の合格科目割合は71.2%、不合格科目と放棄科目はそれぞれ11.8%,17.0%である。女子にあってはそれぞれ88.9%,4.3%,6.8%である。人間科学専攻においては男子は女子にくらべると、①通過率が低い、②逆に不合格、放棄科目割合が高くなっている、③男女共に放棄科目が不合格科目割合を上回っている。

#### (2)言語科学専攻

男子の登録科目中の合格科目割合は76.2%、不合格科目12.0%、放棄科目11.7%である。女子ではそれぞれ87.5%,6.9%,5.6%であった。この専攻においては、①男子の通過率は女子よりも低い、②不合格科目、放棄科目ともに男子が女子を上回っている、③男女共に不合格科目が放棄科目を上回っている。

#### (3)情報科学専攻

男子合格科目割合は73.8%、不合格科目14.1%、放棄科目12.1%であり、女子のそれは89.0%,5.3%,5.8%である。情報科学専攻の場合、①男子の通過率は女子よりも低い、②不合格科目、放棄科目ともに男子が女子を上回っている、③男子では不合格科目が放棄科目を上回っているが、女子では逆に放棄科目が不合格科目を上回っている。

以上から教養学部においては、①男子の通過率は女子よりも低い、②不合格科目、放棄科目ともに男子が女子を上回っている。また、③人間科学専攻では放棄科目が不合格科目を上回るのにたいして、言語科学専攻では不合格科目が合格科目を上回る。そして情報科学専攻においては男子では不合格科目が合格科目を上回るのにたいして、女子では放棄科目が不合格科目を上回っている。

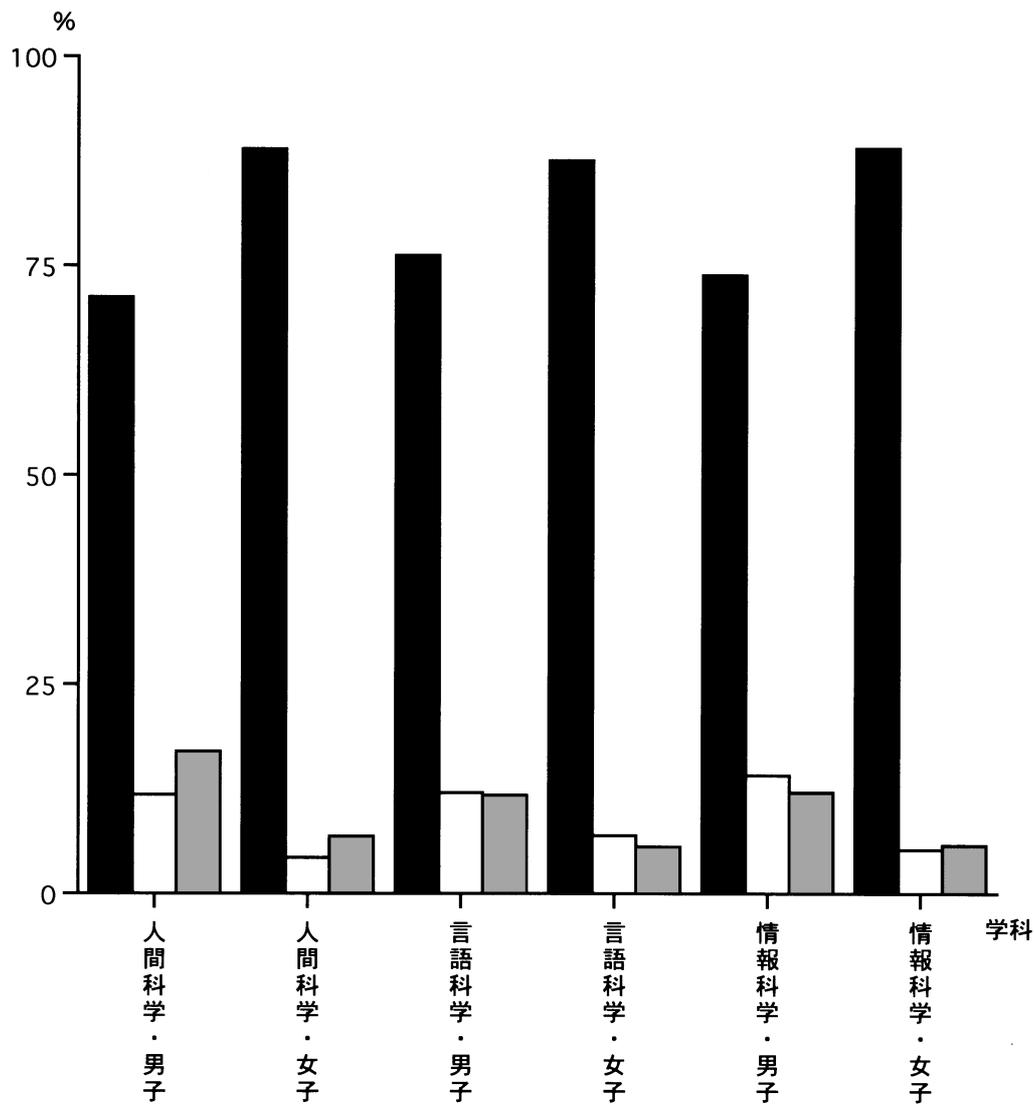
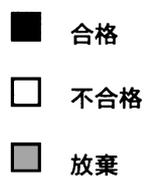


図 5-4 教養学部 3 専攻における合否割合



### 3.5.小括

以上に示したようにどの学科においても男子の通過率は女子よりも低く、不合格科目、放棄科目ともに男子が女子を上回っている。放棄科目と不合格科目の割合の関係は経済学部と法学部の5学科においては不合格科目が放棄科目を上回っている。しかし文学部と教養学部においては必ずしも一貫した傾向はみられず、学科、専攻により、ときには男女によって異なっている。

この差が統計的に有意であるか否かの問題は今後の報告に委ねられることになる。

## 4. 学生の移動の場

大学教育課程を学生がどのように通過していくかは組織論的には学科という1つの社会システムへの出入、すなわち加入（入学）、システム活動（大学での諸活動）、およびそこから離脱（卒業要件の獲得）としてとらえることができる。本研究はこの一連の過程を、成績分析の観点から明らかにしようとするものである。しかしこの過程の実際は決して単一的構造をなしているとはいえない。したがってこの過程が現実にはいかなる多様な通過ルートをとっているかをあらかじめ吟味しておく必要がある。

本報告で取り上げたのは上述した定義による「対象卒業生」である。しかしこれには1996年度入学生以外のもは含まれていないし、1996年度に入学した学生のなかにはこれに該当しないものもある。いってみれば対象学生とは多様な通過ルートをたどった学生の全部ではないのである。そこで以下にいかなるルートがありうるのかを予備的に検討しておくことにする。

【図6】はこれらのルートを模式的にあらわしたものである。これにもとづいて成績の分析課題を検討してみたい。

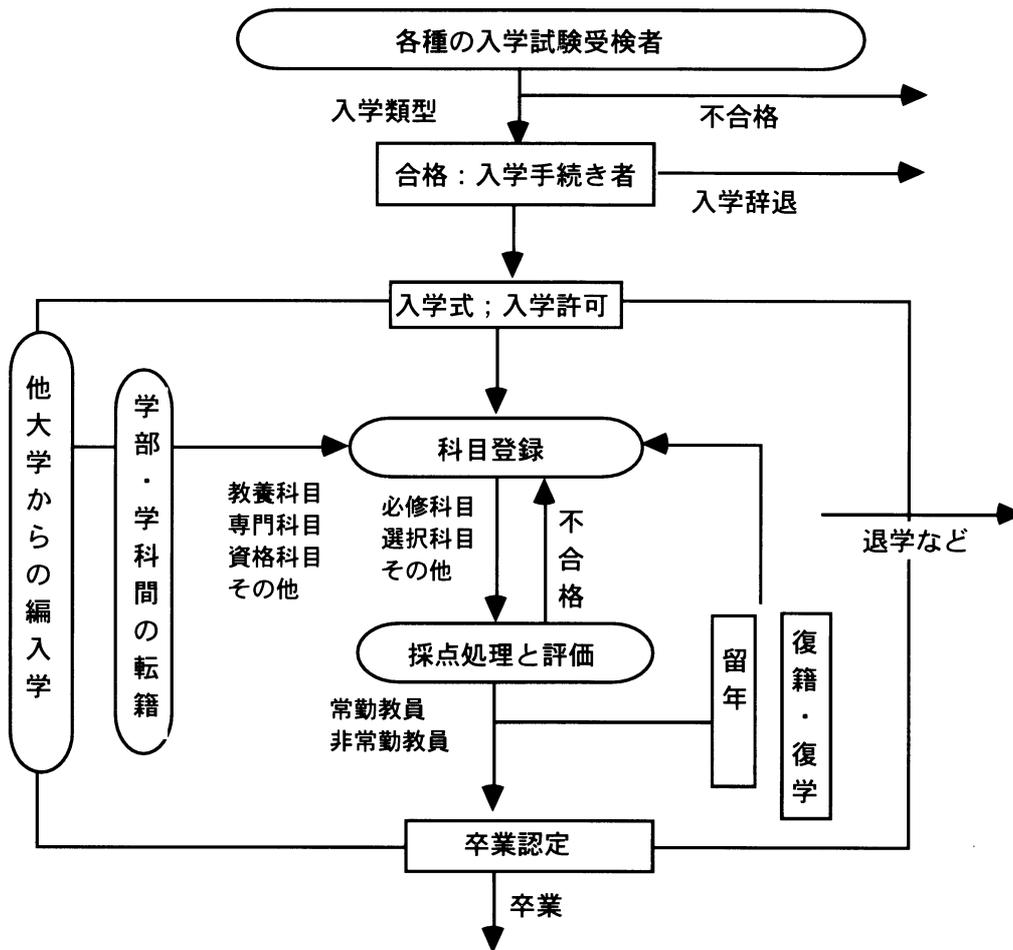


図6 大学における通過ルート

## 4.1.移動空間における条件

### (1)入学類型の多様化

入学選抜方式の細分化は最近の大学に広くみられる傾向であり、入学類型の多様化をもたらしている。このことは同一大学内部における多様な質の大学生の誕生を促進するであろうが、それではこのような入学類型によって大学生の成績は異なるのであろうか。また合格科目、不合格科目、放棄科目はどのようになっているのであろうか。

この点の確認のためには個々の大学生の入学類型を特定するという作業が求められる。しかし入学類型とはいわゆる入学試験だけに限られるものではない。その例として本学における他大学・短期大学などからの編入学生をあげることができるし、大学内部における学部、学科間の転籍、すなわち転学部・転学科学生もまたこれに該当するものである。

編入学生と転学部転学科学生の成績分析の条件は通常の入学試験経由で入学してそのまま同一学科で卒業する学生にくらべるとやや複雑になるし、入学以前の成績をいかにして扱うかについての方法論的検討が必要になるであろう。

また通常の入学類型にしても学部、学科により同じではない、という問題も残っているが、これは成績分析の基本単位を学科に設定することによりある程度は回避できるであろう。

### (2)留年と原級留置き、休学と退学

学生の大学加入のパターンにより条件は異なるが、教育課程の途中に設けられている進級基準を、単位不足により満たすことができない原級留め置きの学生が発生する。本学文系4学部においては一般にこのバリアーは2年次から3年次への移行段階に設定されている。また原級留めの有無にかかわらず、卒業単位不足のために留年する学生もいる。これらの場合にどのような考え方で成績分析をおこなうかもまた検討課題となるであろうが、その前提としてこれらの条件に該当する学生を特定する作業が求められることになる。これと同じことは休学と復学の学生の扱いについてもいえるであろう。

退学の場合は、それにいたるまでの科目の通過率と成績の分析が求められるし、可能な限り退学の条件をも特定しておかなければなるまい。

### (3)科目の性格

科目の性格によって成績や科目の通過率は異なるのであろうか。

現時点では科目の性格についての厳密な規定をおこなわないが、例えば特定の学科の学生にとって教養教育科目とされるものと専門科目となるもの、あるいは卒業要件とはならないが資格取得のために必須の科目などを想定することができる。またこれらの相違によって受講科目あたりの受講者数が異なることもあるであろう。

この他に受講科目が学科の必修科目であるか、選択科目であるかという分類も設定する必要があるかもしれない。また学部、学科間、さらには大学間の単位互換による科目の扱いをいかにするかも今後の検討課題となるであろう。

### (4)教員カテゴリー

学部、学科により比率にばらつきがあるかもしれないが、同一科目を担当するにしても常勤の教員と非常勤教員の間には成績評価の顕著な相違があるのであろうか。これは大学組織内部における身分という社会的カテゴリーの問題であるが、それでは同一カテゴリー内部ではどうなっているのであろうか。後者は教員の特性という問題になる。

このためにはできるだけ多数の受講者を有する科目を選びだし、これらの条件を変数として成績をみていかなければなるまい。しかしこの種の科目には受講学生数を一定範囲に押さえている場合もあるが、教養教育科目のように同一科目であっても受講学生数に大きな偏差がある場合もあり、学生規模と上述のカテゴリーを分離する方法を定める必要がでてくると思われる。

### (5)課外活動などとの関連

学生は教室や実習室での受講だけで1日をすごしているわけではなく、学内外のさまざまな活動をおこなっている。学内では各種のクラブやサークルなどの課外活動があるし、学外においてはアルバイトが考えられる。こうした活動と成績とは関係があるのであろうか。しかしこれらの活動は比較的恒常的な場合もあるが、流動的なこともあり、その実態をどのようにして把握するかの工夫が求められるところである。

さらにアルバイトについていえば学生の家庭の社会経済的条件と関連するところがある

ので、個々の学生の活動状況と家庭の条件との関係把握も将来の課題となるであろう。

視点を変えてみると家庭の経済的援助を受けている一般的な学生と夜間部に多い二部の社会人学生との相違も分析対象となりうる。

入学類型にしろ、科目にしろ、現今の大学の状況においては何が変わってもおかしくはない時代である。以上に掲げたのは成績分析の条件の一例であり、これに尽きるものではないと考えている。

#### 4.2.開放系システムとしての大学教育

大学教育は個々の大学の閉鎖的空間でおこなわれているのではあるまい。一方ではその運営には外部機関が関係しているからである。他方では学生が青年期のあいだに通過する1つの社会的な場であるからである。

本研究では基本的な視界をこの青年期の移行性においている。すなわちどのような地域や高校から大学に加入し、そこを離脱した後にはどのような場再加入していくのかという視点で大学生活をとらえ、この枠組のなかで成績の分析をおこなおうとしている。そのために大学生活前後の状況の把握も将来の課題として考えている。

なお本報告では1996年度入学－1999年度卒業の1学年だけを例にして課題の検討を試みたが、分析対象としては複数年度の学生を対象とし、特定年度の個別的な条件を消去する必要がある。しかしこれには技術的、方法論的な問題がともなうこともまた否定できない。技術的問題としては成績処理件数が膨大な数になることがあげられる。これをいかにしてスムーズに処理していくかが重要な問題となる。

もう1つは年度を重ねることによる年度的変動の問題である。大学教育は現在、大きな変動期に入っているというのが筆者の偽わりのない感想である。卒業年度が数年違うだけでカリキュラムや教育設備、学生数、ときには学科編成ですら変動しうる時代である。このような事態においては学年を積み重ねること自体をどのように考えるのか、その明確な方針を立てなければなるまい。

なお本研究は成績分析を主眼としているが、それを最終的なターゲットにしているわけではないことを付け加えておく。成績分析はむしろ本研究のスタートに位置づけられるべきものである。これらの結果をふまえて、学生の大学過程を含め大学教育のありようを総合的に調査研究することが必要であると考えからである。